

京都精華短期大学

男女共学

1978



入学案内



五歳になる娘が、「これ、パパの顔」といって、自分で描いた画をもってきた。

ぼくは見てびっくり。なぜなら、顔のてっぺんに眉毛と眼があり、中央には大きく上を向いた鼻があり、二つの鼻の穴がまるで豚のそのように、くっきりと全的に描かれていたのだ。いやはや、おどろき呆れて苦笑していると、小学校四年生の上の娘がやって来て、この画を見て、大笑いして、「パパ、こんな顔に描かれて、怒らないの？」と、きくのだ。

ぼくに、怒る気もおこらなかったのも事実だが、下の娘の顔を見おろしつつ、一つのこと気づいたのである。五歳の子どもだから、彼女は下から大人のぼくの顔を見あげているわけである。見上げるように下から上を見れば、眉毛や眼が顔面最上部についているように見えるであろうし、顔の中央に鼻があり鼻の穴がまる見えなのも、当然であろう。つまり、五歳の娘は、自分で見た真実を描いたわけである。ぼくは、自分の見た真実を描いたことを評価して、むしろ「よく描けたね」と、彼女をほめてやった。これに対し、上の娘は大不満。「こ

んな画、学校では通用しないわよ」と、肩をすくめた。

ぼくは、一策を思いついた。今度は奇妙でない当り前の顔を描かせて、前の画と比較させようと、考えたのである。そして、床に腹這いになり、少しぼくを見おろす角度から、もう一度ぼくの顔を描きなおさせようと、試みた。しかし、幼い子どもは飽きっぽいものであるし、姉から「学校では通用しない」といわれたので少しむくれて、「ママ、おやつちょうだい」と、向うの部屋に行ってしまった。すなわち、ぼくの遠大な(?)計画は挫折したわけである。

大学のこのパンフレットの最初に、子どものこと、しかも自分の娘のことを書いて、申しわけない。将来自分も母親となるであろう女性はともかく、子どもにも興味のないハイ・ティーンの男性諸君は、「なんだ、これ」と、最初は思うかも知れない。しかし、少し考えれば、聡明な受験生諸君は、この中にひそんでいる問題を、見抜いてくれるであろうと、思う。受験勉強に追いまわされる高校時代は仕方ないとしても、

小学校から中学校にかけて、自分で見、自分で感じ、自分で考えたことを、どれだけ

諸君は尊重してもらえたか。「学校(世間)の代名詞」では通用しない」と常識を押しつけられることにより、諸君の真実や自主性や主観を押しつぶされてこなかったか。それが、諸君の自信を喪失させる原因とはならなかったか。また、それが、自分で自分が掴みきれず、諸君をもたつかせる要因ではなかったか。もし、そんなことはなかったと断言できる者は幸いである。しかし、そんな幸福な教育をうけてきた者はあまりいないように、ぼくには思えてならない。

まるで、ベルトコンベアーの上に並べられ加工される製品のような、人間を「型」にはめる教育など、われわれは絶対に排除したい。そして、学生のそれぞれの素質や個性や人格を尊重して、のびのびと自己を発見し鍛え、自己形成してもらえよう。な教育を、本学は志向している。いいかえれば、「ぼく」または「わたし」がつねに存在する勉強と生活を、諸君にわれわれの学園でもらいたいわけである。

現代日本の学校では、記憶力のみが過大

に評価され、記憶力のいい者のみを「頭のいい者・優秀な学生」とする傾向があるが、これこそバカバカしい間違いだ。諸君は、それぞれいろいろな素質や個性や人格をもっているはずだ。自分を信じられなくて、はたして人間は幸福になれるであろうか。自己を見出し、自己を鍛えようとする「やる気のある」諸君を、京都も洛北の緑の山すその本学は、待つことにする。

学長 / 深作光貞



図書館



新聞づくり

学科課程概要

もくじ

われわれが受験生に望むこと 2

一般教育	4
英語英文科	8
美術科	16
絵画コース	17
デザインクラス	19
マンガクラス	25
染織コース	27
立体造形コース	29
アッセンブリー・アワー	32
学寮	38
卒業後の進路	40
教員組織	42
教職員紹介	45
大学への交通機関	53

「われわれが受験生に望むこと」

障害者の自立と解放をめざす「脳性マヒ者協会・福岡青い芝の会」。「青い芝の会」

は川崎市に本部を置く全国組織。養護学校義務化に対し「障害者も地域の学校で学ぶ権利を保障せよ」と主張、また車イスのままバスに乗る権利を求めて闘っている。その結成に参加した小田真さん(二八才・九州大学医学部中退)はボランティアのサークルに加入する際のことを「当時の気持を正直にいいますとね、国立大に行けんやつはダメ、精薄の子なんかは、役にもたたんのに生きておつても仕方がなからうに」と感じていました」と語っている。また大学の意味について「結論からいえば、何も学べないです。障害者の人がいうわけですよ、ホントをさらして丸裸になったら、わしの方が強いやないか、世の中を変えるのは大学出やないばい」とね」と述べている。さらに妻の一恵さんは言う。「同じことやってても、九大医学部を捨てきってやってる」というだけで見える目が違う。ものすごくむかつくわ。それこそ学歴社会の考え方そのものやないでしょうか。」

今から八年前、全国に吹き荒れた学園闘

争。ある国立大学全共闘のリーダーであった山本幸一さん(三〇才)は「大学を心から軽べつ」し、後イタリヤの陶芸家カルロ・ザウリのいるフェアエンツァ陶芸大学に一年間留学。「日本の大学と全然違う。一五、六歳の小娘が教授とガンガン言いあう。作品で勝負するというのかな。僕もノビノビ打ち込んだ」。学ぶ、とはこんなことか、と目の覚めるような。と言う。(以上「毎日新聞」連載「教育を追う」「揺れる学歴」より)

争。ある国立大学全共闘のリーダーであった山本幸一さん(三〇才)は「大学を心から軽べつ」し、後イタリヤの陶芸家カルロ・ザウリのいるフェアエンツァ陶芸大学に一年間留学。「日本の大学と全然違う。一五、六歳の小娘が教授とガンガン言いあう。作品で勝負するというのかな。僕もノビノビ打ち込んだ」。学ぶ、とはこんなことか、と目の覚めるような。と言う。(以上「毎日新聞」連載「教育を追う」「揺れる学歴」より)

この入学案内ができあがる頃、どの大学を、どんな学部を選ぼうかとおおいに悩んでいることと思います。もう決めてしまつた人も少なくないでしょう。みなさんがどのように大学を選ぶのか——私たちがたいへん興味があります。

この大学を受験する人たちを見ていますと、「好きな先生がいるから」「自分の学力にあっている」「他に適当な大学がない」

「どうしても入学したい」などいろいろですが、希望する大学に合格できなくて入学してくる人もかなりいます。こういう場合、いろいろ問題があるようです。とくに落伍者意識というか、受験競争に負けた、自分

はダメなんだ、というような意識から抜けれない学生を見ていると気の毒だと思えます。それだけでなく私たちも周囲の学生も愉快なものではありません。とにかく大学だけは卒業しておかなくては、という類の考え方がわからなくはありませんが、そんな学生生活はやっぱりつまらないと思います。私たちはむしろそういう価値観に反対です。希望の大学を再受験するなり、入学した大学で充実した生活を送るようになるなり、大学をやめて方向転換するなり、はつきりした方針を決めるほうがいいのではないのでしょうか。

ふつう大学の選択を考えたときふたつのポイントがあるようです。ひとつは「一流」とか「有名」とかのいわゆる「ランク」。

「一流」大学というのは、入学試験のむずかしさとか「一流」企業とか中央官庁への就職率の高さなどがその基準らしい。もうひとつは受験勉強。いうまでもなく希望大学に合格するに足る「学力」の獲得がその目的である。その内容というのは、記憶(暗記)力や断片的な知識、総じて受験テクニ

一般教育

ひとりよがり人間がもっているいろいろな能力や可能性、生き方とかにかかわりがあるとはとうてい思われません。現実の社会では、積極的であれ消極的であれ、既存の価値を重視する考え方が圧倒的に強いのですが、それが公正・客観性というスローガンのもとに行なわれていることは、教育の貧



保健理論



基礎ゼミ「デザインする」



体育実技

困そのものではないでしょうか。

私たちは、大学社会はまず民主的でひとりよがり尊重される社会でなければならぬと考えます。それを抜きにしてどんな知識・技術・学問も意味のないことだと思えます。また、学生も教職員も同位の協力者として、おたがいに切磋琢磨すべきです。

学問や理論に「解答」はありません。さらに過去のごとは過去のことです。何かひとつのことを追求する、何にもしないでポンやりすごす——とにかく自分の方針をはっきりもった学生が全国からあつまるところを期待します。

入学試験の面接の時などによく、英会話がうまくなりたいたいからこの大学を選んだ、という人がいる。けれどもよく考えてみれば会話で何を話すのかというその内容の部分、つまり自らの内部が豊かになることを伴わずに、会話だけを練習してみても、それはあいさつがうまくなる程度の域を出ることはできないだろう。自らを一つの言語によって表現し、他者とならうとするときに、自らの内部には話すべきことが何もないということに気づくとすれば、それはあまりに空しいではないか。美術にしてもそうである。絵画や造形やデザインや染織を通して表現すべき自分自身が空っぽであるとするれば……。

あるとするれば……。

一般教育などというといかにもいかめしい、無味乾燥の自分自身が生きてゆくこととはほとんど切りむすぶことのない講義を想像するかもしれないが、そしてそういうことしかしていない大学も少なからずあるのだが、われわれは自らのためにも、学生のためにも、そういうことはやりたくない

し、やってはいない。

われわれは一般教育の講義その他の中で何を話すかの何をの部分、何を描き、創るかの何をの部分重視したいと思う。

それは、ひとりよがり学生が、自らを見出し、自分自身の考えをもち、自分を拡げていって自分の可能性を最大限にのびしてゆく、ということにつながるのだが、そういう学生が一人でも多くなつてほしいと願っている。

そのように考えて52年度はつぎのような講義を開講している。

人文科学の分野

● フランスの哲学

——デカルトとマルブランシユ——

● 日本人の生き方

● 青年と文学

社会科学の分野

● 戦後思想史

● 平和と人間

● 人間の自由と歴史



基礎ゼミ「新聞を読んで考える」

社会学「戦後思想史」
私は、この大学にいるかぎり、「戦後思想史」という講義をやめないつもりだ。戦中・戦後を生きてきた人間が、とにかく話したいことを話すとさえそれが昔話のように聞えても、しかし学生たちは、過去の暗闇のなかに一筋の光が横切っていくかのよう、小さなエピソードにも耳を傾けてくれるときがある。私にできることは、それぐらいである。

(日高六郎)



基礎ゼミ「からだとの対話」

基礎ゼミ「女の日常」

- 児童文学をいっしょに読もう
 - 文明と病氣
 - 自分と社会との関係をとらえかえす
 - 聖書をどうよむか
 - ささまざまな差別について考える
 - 女の日常
 - デザインする
 - 技術と人間
 - 新聞を読んで考える
 - 脱テレビのころみ
 - からだとの対話
 - 現代日本の性と愛
 - 在日朝鮮人——その生活・心理・国籍
 - 「生きる」ということ
 - 青春の文学を読もう
- 以上がそのテーマであるが、この基礎ゼミは一般教育、英語英文科、美術科、事務局を含めて、文字通り全学的規模でとりくまれている。また、英語英文科の学生でも美術科的クラスを選択できる、というように二学科の学生の相互交流の場としても、重要な役割を果たしている。



基礎ゼミ「デザインする」

- 現代のジャーナリズム
 - マスコミとミニコミ——
 - 私達の生活と経済
 - 日本文化の特質
 - 自然科学の分野
 - 日常の化学
 - 社会における自然科学の発展
 - ヒトとは？人間とは？
- 総合科目**
- 差別と疎外からの解放
 - 生活の中のテストと実験
 - 公害と社会
 - 情報と社会
- 一般教育科目にはさらに、外国語科目と保健体育科目が設けられている。なかでも特筆すべきものは、外国語科目の一つとして、英語、フランス語とともに、もつとも近くて遠い国のことばといわれる「朝鮮語」が開講されていることで、それは短期大学としてはおそらく全国唯一のものであろう。



基礎ゼミ「社会との関係をとらえかえす」

基礎ゼミ

学生が一方的に知識を伝達されるという客体としてではなく、主体として参加しうるような授業形態として一クラス二〇〜三〇名の基礎ゼミがある。自らの希望するゼミを選んで、ともに何かを創りだしたり、討論や研究をしたりという共同作業をつうじて、自らを発見し、共同性を身につけてゆく。今年度はつぎのような一四クラスを開講している。

朝鮮語のことなど (洪炯圭)
アンニョンハセヨ。
ホンイムニダ。
一行目は「こんにちは」の意。二行目の「イムニダ(または、ムニダ)」は「です」の意だから、「ホンです」となる。
「深作です」なら「フカサカムニダ」となるし、「佐藤です」なら「サトウムニダ」である。
今年、韓国からの留学生としてバク(杜)という女子学生が入学したが、かの女の場合なら「バギムニダ」となり、朝鮮高校からはキム(金)という女子学生が入学しており、その人の場合は「キムムニダ」となる。
この頃、うちに電話をかけてくる人で、例えば「ヨボセヨ(もしもし)、ナカニシムニダ」という具合にかけてくる人がだんだんふえて来た。よるこぼしいことである。
実際に朝鮮語が使える人がもつと出てくるよと思うので、本学でもいろいろなる取組みの仕方を考えている。
まず、「朝鮮語初級」のクラスは、三人の教員(田、西本、洪)が担当者となって、それぞれ発音・文法・会話等を初歩から教えている。
「朝鮮語中級」のクラスは、今年キム・トンリ(金東里)の短編小説をていねいに(ということは、朝鮮語の微妙な言いまわしに十分気がつ

けて)読んでいる。
朝鮮語はなれたところでは、日本語で朝鮮の小説をよむクラス(国際文化コース)がある。ここでは、「韓国文学選集」(冬樹社)に収められている作品をよんで、学生が発表をし、ホンがそれに解説を補足するというゼミ形式で、授業をすすめている。
さらに専攻科では、ハン・ウグン(韓活欣)著「韓国通史」(学生社)を日本語訳で読んでいる。韓国歴史学界の代表的な通史であるから、この程度のもものは朝鮮学を志す者ならぜひ座右に備えておいてほしい。
以上、言語と文学と歴史について少しふれたが、これらを一つひとつ確実に理解し、自分のものにしてもらいたいと思っている。

相互理解とは、自分が相手に分かってもらうだけでなく、自分も相手を理解することなのだから、そのための努力を欠いてはならないであろう。